SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ABP sub-major（Annual Report (2nd semester, 2018-1st semester, 2019）Ⅷ Asia Bridge Program/Japan-Korea Joint Program for Science & Engineering Students）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比留間, 洋一, 原, 芳久, 藤巻, 義博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027186

アジアブリッジプログラム副専攻

比留間洋一[1]／原　芳久[2]／藤巻　義博[3]

1．アジアブリッジプログラム（ABP）副専攻の目的と概要

1．1．目　　的

ABP副専攻は、平成27年度から開始された「静岡大学アジアブリッジプログラム」を通じてもたらされるグローバル化の恩恵を、一般の学生と共有するもので、学部や国籍を問わず様々な学生が集まり、幅広い視野と国際的な感覚を身につけることを目指している。

副専攻の履修登録学生は、所定の授業科目の中から、個別分野科目（4科目8単位)、学際科目（2科目4単位)、海外研修（1科目2単位)、修了研究（1科目1単位）の計15単位以上を取得することで、修了証書が授与される。ほぼ全ての授業は英語で行なわれており、履修登録の要件は、開始時がTOEIC550点以上、修了研究はTOEIC600点以上となっている。

1．2．履修登録者数

履修登録は所定の申請書およびTOEICスコアの証明書を提出する。各学部1学年10名つまり全学で毎年度60名程度の履修登録を目標としているが、副専攻が開始した平成27年度を除き、毎年度10名程度となっている。令和元年12月1日現在、累計で102名が履修登録しており、うち令和元年12月1日現在の在学生履修登録者数は45名である。

ABP履修登録者数（令和元年12月1日現在）　　単位：名

入学年度	人文	教育	理学	農学	学環	情報	工学	合計
平成27	22	4	8	1	0	6	16	57
平成28	6	0	1	0	0	1	1	9
平成29	3	0	1	0	0	8	2	14
平成30	3	0	2	0	0	5	1	11
令和元	2	2	1	2	1	2	1	11
合計	36	6	13	3	1	22	21	102

1．3．修了者数

平成30年度に初めて、7名（人文：4、工学：3）の修了者を輩出した。副専攻が開始した平成27年度の履修登録者数は多かったが、修了まで達しなかった学生も少なくない。

1．4．年間スケジュール

下記がほぼルーティン化された年間スケジュールである。スケジュールには記載していないが、この他にも例えば、1）履修登録者数を増やすため、機構のニュースレターやABP公式Facebook、大学広報誌等で副専攻のPRを行なったり、2）修了者数や海外研修参加

者数を増やすため、履修登録者に対してメールを配信するなど様々な働きかけを行なったりしている。

4月　　新入生のガイダンス資料として副専攻説明会のチラシを配布
　　修了研究ガイダンスを開催
5月　　副専攻説明会を開催
6－7月　海外研修オリエンテーションを開催
9月　　海外研修を実施
10月　　海外研修成果報告会を開催
1－2月　修了研究報告会（ポスター発表）を開催
3月　　修了証書を授与

2．平成30年度後期及び令和元年度前期の授業

本学の英語授業では新入生全員にTOEIC (R) L&R IPテストを課しており、この成績の判明するのが7月頃になることから、1年生を対象とする副専攻の授業科目は後期から開講されている。

2．1．個別分野科目及びAL（学際）科目の受講者数

以下の副専攻科目の受講者数には、副専攻履修登録者及びABP留学生の他に、まだ副専攻の履修登録を行っていない学生等も含まれている。後者の学生に対しては、授業等を通して、副専攻への履修登録を促している。

平成30年度後期　受講者数　　単位：名

科　目　名	担当教員	受講者数（静岡）	受講者数（浜松）
ABP-EN心理学	青山郁子	—	13
ABP-EN生命科学	DEO VIPIN KUMAR	1[4]	—
ABP-EN科学と技術	ダリウス　グレニジ	12	8
ABP-EN ことばと表現	澤野亜美	24	6
ABP-EN進化と地球環境	宮崎さおり	—	5
ABP-EN 法と社会	土生英里	7	4
ABP-EN Southeast Asia Seminar	新江利彦	—	7
ABP-EN Global Business Studies	土生英里	21	20

令和元年前期　受講者数　　単位：名

科　目　名	担当教員	受講者数（静岡）	受講者数（浜松）
ABP-EN自然と物理	MOBEDI MOGHTADA	12	—
ABP-EN生命科学	DEO VIPIN KUMAR	—	10
ABP-EN生活の科学	原　芳久	—	5
ABP-EN進化と地球環境	宮崎さおり	22	—
ABP-JP東南アジアセミナー	比留間洋一	8	—
英語海外研修A（集中講義）	原沢伊都夫・ユーリック	6	3
英語海外研修B（集中講義）	熊井浩子・山本好比古	7	8
ABP海外研修Ⅰ（集中講義）	藤巻義博・比留間洋一	3	3

2．2．海外研修

海外研修は2019年度ABP副専攻説明会の中で、現地を直接見聞することを通じて、将来アジアと日本の架け橋として活躍するための基盤を作ると紹介されている。それは日系企業の海外事業を見学する海外企業研修Ⅰとアジア各国の社会や歴史に触れる海外文化研修（海外研修Ⅱ）の二つのタイプの研修で構成されている。海外企業研修Ⅰは日系企業を訪問し工場や現地企業人と交流をすること、海外文化研修Ⅱはアジア各国の社会や歴史に触れることを主な目的としている。2019年度は海外企業研修Ⅰを主担当教員　藤巻、分担教員　比留間で行った。

2019年度の海外企業研修は下記点を考慮して企画した。

1）年々海外研修に参加する学生が減ってきているのを改善する
2）単に企業を訪問するのでは無くテーマを持ったストーリーのある研修をする
3）学生のその後の人生にプラスとなるような研修をする
4）参加する学生の就職活動にプラスになるような研修の場を提供する

最初に、1）～3）のコンセプトを入れた魅力的な研修ならより多くの学生も参加するだろうと考えた。副専攻履修の日本人学生は、外国人留学生の中に混じって勉強するくらいであるから元々意識が高い、特に海外に目を向けているから将来は海外に絡む仕事に就きたいのだろうと考え現地で長く仕事をしている人達を訪問することを考えた。それも少なくとも10年以上住んで現地或いはその地域に目を向けている人達に「どうして“わざわざ”海外を拠点にして一からビジネスを立ち上げたのか、どうしてその地に人生を掛けたのか」を聞くのは、学生にとって大きな刺激になると考えた。ただし現地子会社の駐在員は、日本本社から派遣されて長くて5年、いずれは日本に帰国しその国は通過点であるので訪問対象から外した。

次に海外研修の対象国をベトナムとした。主担当教員、分担教員ともにベトナムを専門としており、また近年日本企業の進出先で一番多いのがベトナムであるという点や静岡大学の外国人留学生にはベトナム出身が多い点も考慮した。日本人が多いシンガポールも候

補に挙げたが旅費が高くなる恐れがありベトナムに絞ることにした。

訪問先については出来るだけ色々な分野の方々に話を聞くという視点で候補を絞っていった。最終的にベトナム最老舗外食店経営の小林氏、女性写真家・雑誌編集者の勝氏、国際建築家の竹森氏、ANA就航を手掛けたコンサルの土田氏、現地ブンタウで広範に事業を展開する野澤氏、日越大学長の古田氏を訪問することにした。また現地での大規模プロジェクトの見学も計画して、ゼネコンのフジタの上野氏、ファースト化工小島氏、住友商事の伊原氏を訪問してJICAのODA事業であるホーチミン地下鉄高架プロジェクトやアジア最大のニプロ工場プロジェクトを見学した。また現地との交流としてハノイ国家大学外国語大学のトゥイ先生や日本語学科の学生達と、チュン校長先生の明越日本語学校生徒達とはそれぞれの文化を体験する異文化交流を行った。最後の訪問都市ブンタオではフーミー工業団地の風間氏を訪問して日系企業のベトナム進出状況を見た。この様に研修には様々なプランを盛り込み、訪問都市もハノイ、ホーチミン、ブンタオの3か所となった。

4）としてこの研修に特に力を入れたのが学生のビジネス体験及び就活力向上であった。企業の新入社員研修並みの指導を取り入れ、服装や研修スタイルはビジネスをベースとした。学生は訪問する方々へのメールでの事前挨拶や自己紹介、当日の段取り、準備等についても企業が求める「積極性」「外向性」「リーダシップ」を意識して学生達に自主的にやらせた。更に事前研修、事後研修でのプレゼンテーション、効果的なプレゼンとはどうあるべきか等も就活を意識して指導した。学生達の事後研修でのプレゼンの出来栄えは素晴らしく学生達が大きく成長したのが窺える結果となった。

最後に、このような研修内容がタイトルを見ただけで分かる様に、これまでの「副専攻



学生の為の海外企業研修」ではなく、「目指せ！ネキストグローバルリーダー」、サブタイトルを「グローバル（アジア）で活躍する各界のリーダーとの交流を通して将来グローバルリーダーとして活躍するための知識と経験を積む」といった、キャッチーでインパクトのあるものにした。

今回の海外企業研修は新しい試みとして企画したが、学生が大きく成長し、学生自身の満足度もかなり高かったことは成果発表会及び事後レポートからも確認できた。そこで次回の海外企業研修はこのコンセプト、コンテンツをブラシュアップ、課題をクリアして、更に充実した海外企業研修を企画したい。またそのために研修を広く学生に告知して参加を増やすための手段、チャネルを見直していく。その一環として今回の海外企業研修の記録を印刷物で残し、今回参加した学生達に広報協力を仰いで幅広く他の学生に告知していく事も検討している。

2．3．ABP修了研究

平成30年度の修了研究として、平成31年2月14日に2名が修了研究のポスター発表を行なった。1名は工学部機械工学科の4年生で指導教員は機構教員　袴田、もう1名は工学部化学バイオ工学科の4年生で指導教員は機構教員　青山であった。

修了研究はABP副専攻の集大成として、ABP関連科目および海外研修科目を通じて得た研究成果を、各履修生の定めた研究テーマに沿って報告書にまとめ、その概要をポスター1枚に整理して英語で発表をさせるものである。研究のテーマは、グローバル化の推進にかかるもの、アジアの現状を見つめるもの、あるいはこれらの国の抱える課題解決に助言を与えるものなど発表者の関心に基づき、自らが選んだ指導教員（履修生の主専攻における指導教員ではなく、自身の選んだテーマについて指導を仰げる教員を全学から選び、自ら依頼して指導を仰ぐ）とともに、半年から1年をかけてまとめ上げることとしている。

修了研究発表会は、2時間程度の発表時間を設け（平成30年度は発表者が2名だったため、約1時間とした）、その間に教員学生問わず、誰でも自由に会場に足を運び、ポスターの前で発表者から直接研究成果を聞いたり、質問をしたりする形で実施される。参観者を制限しないことから、発表者は聴衆それぞれの関心のある切り口で質問を受けるなど、自身のテーマに関してさらに見識を深めるよい機会となっている。また直接発表者とやり取りのできなかった参観者も、機構の用意したコメントシートに感想や質問、助言などを記入して発表者に渡すといった形で、多くの聴衆の意見を発表者およびその指導教員にフィードバックできる仕組みをとった。

以上

---

[1] 令和元年度前期の教務担当、本報告書では特に全体の取りまとめを担当した。

[2] 平成30年度後期の教務担当、本報告書では特に「修了研究」の執筆を担当した。

[3] 令和元年度「海外研修」の主担当、本報告書では特に「海外研修」の執筆を担当した。

[4] 実際は1名ではなく、一部の交換留学生など履修登録を行わない受講生もいた。他の科目についても同様のケースがありうる。